

菅原やすのり

生きろ

— 父さんの言葉 —



まえがき

「幸せはどこにもないぞ

親子してどうやら暮らせる

ここにあるぞよ」 勇次郎

この言葉は勇次郎が残した文章の一節である。父の死後、机の中から見つかった手帳に書かれていた。

僕の父勇次郎は一九七一年、東京信濃町にある慶應病院で肺癌の為、この世を去った。享年六十歳。

生前、父は僕によくこんな事を言っていた。

「俺は六十歳までは、子供たちや家族のために馬車馬のように全力で働く。けどな、やすのり。それが終わったら、その後の人生は俺のためにくれ。地域の子供たちの剣道道場をつくるんだ。そしてお前たち俺の子だけではなく、次の時代に生きるすばらしい日本の子供たちのために働くんだ」

しかし、父勇次郎は不思議にも、まさにちょうど六十歳でその生涯を閉じた。地域の子供たちのための剣道道場をつくるという夢は果たされなかった。

また父は、「俺は戦争中あまりにも尖がった生き方をし過ぎてきた。戦争が終わったこれからは、角のない丸い心の人間として生きていきたい」と言つて、戦後、「玉子屋」という屋号を自分の店につけた。

長兄の勇継は父の死後、この「玉子屋」という屋号を継いでお弁当会社を立ち上げ、そのユニークな経営で売上日本一となり、現在も、テレビ番組「カンブリア宮殿」に出演するなど、仕出し弁当業界最大

手の会社の会長として活躍を続けている。

終戦の年に、菅原家の三男として満州で生まれた僕は、翌年、家族と共に日本に引き揚げてきた。思えば、故郷・水戸では色々な事があった。そして今は、世界の舞台で歌う歌手としてニューヨーク国連本部や、各地の難民キャンプなどで、国際的な活動を続けている。今ままでコンサートを開催した国は八十ヶ国を超え、今年で音楽活動四十五周年を迎える。

早稲田大学建築学科を卒業し、博士課程で都市計画を研究していた僕が、なぜ平和を求めて、世界の舞台で歌い続ける歌手になったのか。その原点は、平和を追い求めてきた父の背中を見て生きてきたからのような気がする。

動乱の中、地位にも名誉にも目を向けず、ひたすら家族を守り、弱い立場の人たちのために全力で戦い抜いた父勇次郎。僕は改めて父の大きさを知ると同時に、父の残した「幸せはどこにもないぞ…」の言

葉に込められた父の本当の心を知りたいと思った。

今では、父と人生を共にした母もすでに他界してしまっただため、姉や兄たち、父を知る人々に父の生きてきた歴史を聞いて回った。すると、それまでには思いもよらなかつた父の波乱の人生と菅原家の数奇な運命が浮かび上がってきた。僕は思わずペンをとった。

この「生きる　く父さんの言葉」は、音楽活動四十五周年を迎えた僕からの、そんな父への感謝のメッセージでもある。インターネッ ト全盛時代。家族の絆も薄らいでいる昨今。父勇次郎の壮絶な生き様と菅原家の人々の歴史を通して、少しでもその時代を生きた人々の実像を、それを知らずに生きている今の時代の人達にもお伝えすることが出来れば幸いである。

生きる  
　　＼ 父さんの言葉 ＼  
もくじ

生きる  
く父さんの言葉く  
もくじ

まえがき／3

第一章 — 大地の歌 — 大連・奉天

アカシアの大連／14

二人の満州娘／18

晴れ姿／20

父の秘密／23

軍からの追放／27

奉天へ／30

天国と地獄／34

やすのりの誕生／38



- 終戦／42  
深夜の訪問者／46  
ロシア兵／50  
逃亡計画／52  
ビルからビルへ／55  
やすのりの危機／60  
消えた勇継／66  
新しい家族／69  
三人の部下／72  
難民救済商社／77  
かめ事件／81  
死体の山／85  
開拓移民の逃避行／88  
着物と肉まんじゅう／92

開拓団の歌／94

第二章 — 祈りの歌 — 引き揚げ船

帰国／102

無蓋列車／105

葫蘆島／107

出航／112

水葬／115

船上のど自慢／120

八重ちゃんとお菓子／125

ふるさと／128

日本到着／133

第三章 — 生命の歌 — 水戸

ふるさと水戸へ／138

焼け跡からの再起／143

養鶏／147

残飯集め／153

家族のど自慢／157

揺るぎない価値／163

天使の歌声／167

那珂川／172

洪水／175

遠足のみかん／179

ちんどん屋／182

国際劇場／185

父さんの言葉／188

詐欺事件／191

上京／194

あとがき／199

菅原やすのり年表／204

第一章 — 大地の歌 — 大連・奉天

## 第一章

## ——大地の歌——

大連・奉天

## アカシアの大連

昭和十七年五月、幸枝は先に満州に渡った夫勇次郎のあとを追って、六歳になる長女の幸子、三歳の次女妙子、そして二歳の長男勇継いさつぐを連れて大連港だいらんにたどり着いた。

三人の子供を連れた幸枝が船から降りていくと、港で家族の到着を待ちわびる勇次郎の姿が目に見え、飛び込んできた。

「わー、さすがお父さんだ。かっこいい！」

長女の幸子は、将校マントをひるがえして、長いサーベルを肩にかけた父勇次郎の姿がまばゆかった。

何しろ勇次郎は、幸子が生まれる前に満州事変で勇猛果敢な働きをして、金鷄勲章を授与されたほどの英雄である。雑誌「キング」に掲載された鬼軍曹の武勇物語は、勇次郎がモデルなのだ、幸子が住んでいた水戸でもっぱらの評判だった。

「お父さんは立派な人に目をかけてもらって、満州に行ったのよ」  
幸枝から勇次郎のことをそう聞かされていた幸子にとって、目の前にいる父の存在は何よりも誇りだった。

一家は四頭立ての馬車に揺られて、アカシアの花が満開に咲き誇った並木道を、蜂蜜のような甘い匂いに包まれながら進んでいった。

ロシアの統治時代にダーリニーと呼ばれていたこの街は、明治三十八年に日本が日露戦争に勝利すると、日本の手に渡って、大連と呼ばれるようになった。

「大連は、もともとロシア人がつくった美しい港町だよ。ところが、戦争で勝った日本がロシアから奪ってこの町を受け継いだんだ」

勇次郎が子供たちに語ったこの日本とロシアの関係が、近い将来、菅原家の暮らしにも暗い影を忍ばせることになるとは、このときまだ想像もできないことだった。

子供たちにとっての大連は、今、自然に囲まれた美しい街だった。街の中心部は日本人の手により近代的な街並みが整備され、その周辺には山や海が広がっている。

山のふもとには貧しい満人（満州国で暮らす日本人たちの現地中国人に対する呼称）労働者の暮らす地区、その近くにはロシア人街、山の上には富裕層が所有する別荘地があった。

その別荘地には、大連に本社を構える満鉄（南満州鉄道株式会社）の社員ら、地位のある日本人家族が大勢暮らしていた。

菅原一家はそれらの中でも、ひとときわ高所に位置する白雲山の頂ま



でたどり着いた。

そこには三階建ての立派なレンガ造りの洋館が建ち、辺りはライラックの甘い香りがただよっていた。

この建物も元は別荘として使われていたのだろう。あまりの豪邸に驚く幸枝たちだったが、その興奮は中に入っただけですぐに立ち消えた。

室内はペチカが設置されており、造りこそ非常に豪華であるものの、長らく使われていなかったのか、それとも戦争の打撃を受けたのか、ひどく荒れ果てた状態だった。

三階のトイレはズドンと床が抜け落ちており、下を覗くと一階の部屋まで見えてしまう。

この廃墟のような山の上の豪邸。それが菅原家に与えられた大連での住まいだった。

## 二人の満州娘

家の改修も終わり、家族五人が再び揃つての大連での生活は、とても恵まれたものだった。大連に来てしばらくすると、幸枝は四人目の子供を身ごもつた。

生き物や植物が好きな勇次郎は毎朝、夜が明けると共に起き出して、山の片隅につくつた畑の手入れをしてから出掛けて行く。

「お父さんは、植物や土が大好きなんだな。軍人なのに……」

幸子はそんなことを思いながら、勇次郎がほうれんそうや真つ赤なカブを手間暇かけて育てる姿を眺めていた。

家の前から南の方向を見下ろすと、山々には別荘の赤や青のかわいらしい屋根が点在し、その先には、銀色に輝く星ヶ浦の美しい海が広がっている。一方、東の方向を見下ろすと、山並みの先には、満人部

落が小さく見えた。

山のふもとには、手や足を失った日本兵が大勢入院している陸軍病院があり、ひと際かわい顔で歌の得意な幸子と妙子は、家で繰り返し歌の練習をしては、その陸軍病院へ頻繁に慰問に出掛けた。

二人はチャイナドレスに身を包み、傷ついた兵隊さんたちを前にいっつも決まって服部富子の「満州娘」を披露した。

わたしや十六満州娘

春よ三月雪解けに

迎イシチュンホワ春花ガが咲いたなら

お嫁に行きます隣村

王ワンさん待ってて頂戴ネ

満州娘になりきった幼い二人のショーが終わると、幸子と妙子は兵

隊さんたちから口々に話し掛けられた。

ある兵隊さんは、いつもその日の食事に出されたおかずを少し残しておいて、それを飯ごうに入れて、お土産に持たせてくれた。

片手しかない兵隊さんは、妙子を抱え上げながら「満州娘の歌はとっても上手だった」と言つて褒めてくれた。

そして帰り際には、松葉づえをついた兵隊さんが、病院の外まで見送りに出て来てくれた。

二人は兵隊さんたちの喜ぶ姿がまた見たくて、家に戻ると次の慰問に向けて練習に励んだ。

## 晴れ姿

やがて春が過ぎ、太陽がさんさんと降り注ぐ季節になると、山には桔梗ききょうや百合の花が至るところから顔を出す。

勇次郎は、別荘地帯の向こう側に広がる星ヶ浦の浜辺へと、家族をたびたび連れ出した。浜辺で木の枝を拾い集めて、飯ごう炊さんをすることもあった。

勇次郎は幸子と妙子を自転車の前と後ろに乗せて急な坂道を上ったり、子供たちとの交流を心から楽しんでいた。

大連小学校に通いはじめた幸子がクラスの総代に選ばれると、声が小さいのを心配した勇次郎は、ことあるごとに「以上総代、菅原幸子」と幸子に向かって呼びかけて、幸子が「はいっ」と大きな声で返事をするのが日課になった。

修了式の日、幸子が学校でふと後ろを見ると、勇次郎が立っている。

勇次郎は子供の晴れ姿を見るために、仕事を抜け出して小学校まで様子を見に来ていたのだった。子供たちと離れ離れで暮らしてきた勇次郎にとって、きつと娘幸子の活躍は何よりの喜びだったのだろう。

岩の間に群れて咲く赤くて小さななでしこの花、色とりどりのコス

モス、背の高い紫苑しおんなどが山にいつせいに咲きはじめると、季節は本格的に秋を迎える。

次女の妙子は大連の自然にすっかり溶け込んで、山の中を夢中で駆けまわった。

家の近くのりんご園には、小さくて赤々とした満州りんごがたわわに実り、妙子はそれを皮ごとカリカリかじるのが楽しみだった。

そして夕暮れ時、太陽が海の中へとゆっくり沈みはじめると、海の上をまっすぐに、美しいじゅうたんを広げたような金色の橋が、陸から太陽に向かって架けられる。

妙子は金色の橋が消えないうちに橋の上を渡り終えれば、太陽のもとまで行けるような気がして、山から海に向かって夕陽の中を全速力で駆け下りて行った。

## 父の秘密

勇次郎は家をしばらく空けることが多く、その行動はつねに謎に包まれていた。

本人の口から多くが語られることはなかったが、軍の中での秘密の任務を担い、スパイ諜報活動のようなこともしていたらしい。

勇次郎がいつでもどこへ出掛けて行くのか、どのような仕事をしているのか、妻の幸枝でさえほとんど知らされていなかった。

しかし夕刻に子供たちが窓の外を眺めていると、勇次郎がマントをひらひら風になびかせながら、家に向かって山を登って来る姿が目に見え、飛び込んでくる。

その姿はさつそうとしていて、あまりに様になっているものだから、勇次郎が帰って来る日には誰かが窓の外にその姿を確認すると、

「あつ、お父さんが帰ってきた！」

と言って家族ではしゃいだ。

ある日、勇次郎は子供たちを集めて言った。

「お父さんはみんなを満州に呼んだときすでに、軍人をやめさせられていたんだ」

実は満州に渡ってから勇次郎は、軍服を着ていて見た目は軍人そのものだったが、実際の身分は軍人ではなく、軍属になっていた。

勇次郎は十代のときに両親を亡くしている。学校での成績は優秀だったが、家庭の事情で進学は断念せざるを得なくなつた。

学歴のない自分が働くなら軍隊に入るのが一番だと判断した勇次郎は、教師になる夢をあきらめ、軍人の道を極めることにした。

なりたい職業とは違つたが、負けず嫌いで、何でもやるからには徹底してやる主義の勇次郎は、血のにじむような努力をして腕を磨き、陸軍士官学校で剣道や柔道を指導する立場になつた。剣道でいくつか



の賞も受賞した。

昭和七年、満州事変の翌年から軍人として戦争に参加するようになった勇次郎は、何でも命がけで取り組み、手柄を立てて、金鵄勲章を受けるまでになった。

その後、小学校からの顔なじみで、教師をしていた幸枝にプロポーズして、二人は結婚する。

昭和十三年、三十歳になった勇次郎は、三人目の子供を妊娠したばかりの幸枝と幼い二人の娘を残して、単身で満州奥地のハイラルに赴くことになった。

戦地で戦う若い兵士たちに上からの指令を伝え、教育指導するのが勇次郎に与えられた任務だった。

まもなくして、ノモハン事件が起きる。満州とモンゴルの国境をめぐって、日本軍とソ連軍による激しい戦闘が、日々繰り広げられるようになった。

当時の日本では、東南アジアなど他の地域での戦闘に重点が置かれていたため、ノモハンに出向いた日本の軍隊には、十分な兵器がなかった。

さらに、軍の幹部は指揮力が低く、高慢なふるまいをする者が多く、若い兵士の命を無視した指令が横行していた。

兵士たちは幹部の無謀な戦略による、はじめから勝ち目のない戦闘に次々と繰り出されて、戦地で命を落としていった。

幹部からの指令を兵士たちに直接伝えるのが勇次郎の役目だったが、若い兵士たちは勇次郎を慕い、どんな無謀な命令にも誰一人背くことなく、戦地に向かった。

そして多くの兵士が命を落としていくのが、勇次郎にはいたたまれなかった。

## 軍からの追放

ある日の夜、道の向こうから、宴会を終えて泥酔した上官が、軍服を肩にかけて、ふらふらと歩いてきた。

すれ違いざま、「一緒に料亭に行こう」と声を掛けられた勇次郎は、やむなく料亭に同行することになった。

料亭で上官は、ノモハン事件の激戦の際の出来事を、笑いながら話しはじめた。

自分の指揮に欠陥があり、それによって多くの兵士たちを戦死させてしまった事。死に直面した兵士たちを注射で安楽死させた事……。

これだけ多くの命が犠牲になったのは、まぎれもなく上官が多くの兵士の命を無駄にする作戦をしていたからにも関わらず、今、笑い話として自分たちの前で話し続けている。

勇次郎は激しい怒りが湧き上がってくるのをついに抑えることができなかつた。

次の瞬間——、勇次郎は軍刀を抜いて、上官を斬りつけていた。上官は一命を免れたが、軍の内部は大騒ぎとなった。

その後、日本で軍法会議にかけられた勇次郎は、軍服を脱がされ、勲章を取り上げられ、軍人として今まで築き上げてきたものすべてを失った。

しかし、勇次郎は軍刀を抜いた時点で、すでに軍人をやめる覚悟を決めていたのだった。

あのととき上官の悪事を止めるには、この上官を斬る他なかつた。この行動によって、これから命を落としていくだろう多くの部下たちを助けることができるのなら、それと引き換えに失う自分の地位にも勲章にも未練はなかつた。

勇次郎は、日頃から考えていることがあつた。

勲章を持つ者は、他の人より偉いわけではない。勲章を与えられ、高い地位を得た人たちは偉そうにしたがるが、勲章や高い地位を与えられるというのは、その分責任が生じるといふことに他ならない。

上に立つ者は偉ぶるのではなく、重要な任務を全うし、下の者にも責任を持つことが務めなのだ――。

だから、軍人としての地位を捨てた今、これからは何より人の命を尊重し、国のためだけではなく一人一人、個人を守る生き方をしていこうと勇次郎は決めた。

本来ならば上官を斬り付けるといふ行為は、軍人の出世コースを外れるどころか、死刑になりかねない。

ところが、この上官は軍の中でも悪名高かったため、勇次郎の人物を知る多くの人の助けを得て、情状酌量の措置で、除隊になるだけで釈放された。

軍人の職を剥奪され、追放された勇次郎は、鈴木貫太郎の後ろ盾もあり、事情を知るさまざまな人の助けを受けて、軍属として一からやり直すことになった。

そして、何事にも全力でとり組み、次第に仕事振りを認められ、ここでも軍属としての地位を確立していった。

勇次郎が家族を大連に呼んだのは、そんなときだったのだ。

奉天へ

大連で暮らしはじめてから一年後、菅原一家は勇次郎の仕事の都合で奉天ほうてんに引越すことになった。

実業家の山下太郎（のちにアラビア石油株式会社を創立し、アラビア太郎の名で知られる）に引張られて、南満州鉄道株式会社（通称満鉄）の奉天支社に所属することになったからだ。